



遠近新聞
第十三號



定價一匁

西垣文庫
文庫10
7265
10



特 文庫10
7265
10

遠近新聞第十二号

慶應四年五月六日

建白書之写

廣^{ひろ}用^{もち}言^{こと}路^{みち}の由^{よし}教^{しよ}書^{しよ}奉^{たてまつ}恭^{こう}閱^{くわん}のよ舟^{ふね}謫^{たふ}陋^{ろう}拙^{せつ}櫟^{りやく}の身^みを
 不^な顧^こ誓^{ちか}首^{くび}昧^ま死^し敬^{けい}而^{して}
 有^あ栖^{すま}川^{がは}宮^{みや}大^{だい}總^{そう}督^{とく}府^ふ參^{さん}謀^{ぼう}諸^{しよ}公^{こう}惟^{ただ}下^{くだ}へ言^{こと}上^{かみ}仕^{つか}の既^{すで}に德^{とく}
 川^{がは}某^{ある}叔^{しよ}罪^{つみ}は仰^{おほ}舟^{ふね}因^よ之^を江^え戸^と万^ま姓^{せい}共^{とも}塗^ぬ炭^{たん}の苦^{くるしみ}を免^{まぬ}らむと
 安^{やす}穩^みに在^ある條^{じょう}實^{じつ}に天^{てん}恩^{おん}の博^{ひろ}厚^{こう}と日^ひ夜^や難^{がた}有^あ奉^{たてまつ}拜^{らい}戴^{たい}
 の然^{しか}る處^{ところ}頑^{がん}固^この會^{かい}藩^{はん} 朝^あ命^{めい}を奉^{たてまつ}拒^げひし舟^{ふね}即^{すなは}時^{とき}に官^{くわん}
 軍^{ぐん} 濟^す差^さ向^{むか}は爲^な成^{なり}の處^{ところ}野^の上^{の上}表^あ度^た々の合^あ戰^{せん}に官^{くわん}軍^{ぐん}方^は

遠近新聞

五十八

西垣之庫

5721

敗北死亡不少之由承及以右様子にての會津表迄
 河打入は奏功の儀を乍恐當年より行届難中と奉存
 以就ての野上の百姓共日夜課役を驅使せられ耕作
 の間曾て無之其田畑を只々荒蕪に打任せし蠢愚
 之質憤悶は不堪以而却天朝を疾怨致者不少尚
 御征伐は見合無之上も八州の百姓共皆驅使の苦餓
 死の患は難堪憤怨死生を不顧一揆相企恐多くも終
 一の天朝を奉仇視の如官軍へ對し決死憤闘可仕
 然を官軍も亦不誅戮之を不能儀は有之今也王
 政一新四海歸一の折柄無辜の良民方は苦患の阱に

陥り不得已而為惡く無悔者共と皆誅鋤有之以而無
 遺者乃王政何以一新可や哉と奉存以且會の
 朝命を奉拒以儀も亦所謂祭之犬吠堯とす以儀と存
 以処今般六師御差向の上も如何の支状も可有之哉
 兼而仙臺領主の建白を拜見仕以徳川某も罪状
 の儀明白も未慥に就ての會之儀も他支無之只能吠
 のと奉存以又奥羽某の領主実も會へ向ふて一矢
 を放つ者有之同鋪且奥羽の自古剛愎強悍の名宇内
 偏ね一若激怒有之上の一致いし驕傲割據
 して王政を不奉因り王化も竟も東北も普及

不仕は相成可申然る上は外国へは對一國の取はて
無之の哉上國の各力を盡し多年は征討有之は
得を奥羽も遂は伏罪致し鎮静も可仕雖然終は奥羽
鎮静して終は神州疲弊し大害を醸し成し可申况
や外国輻湊其覬覦致者不少若一人為睥睨者有之を
何様の手段有之防禦可成哉と悲嘆痛切の至と乍
恐奉存ひ因て奉竊謂は儀は急し各所の官軍へ一時
進行の儀差控可申旨 嚴令有之はて速は徳川血胤
の者と以て家相續は 仰舟其祖先格別勲績有之は
舟其由緒有之國土を如舊例皆御預は成徳川相續の

儀無滞相済は上徳川氏の使者を以て會藩へ 朝廷
莫大仁惠の儀委細申因はへを容保始は圖藩一同悚
飲の至は不堪即時解兵脱甲して謹慎恭順可仕は然
は六師を不被為勞は勿頑藩奉聽從而八州の蒼生共
皆苦患之阱と出では勿復は仁風之薰陶を奉蒙儀其
喜不可言於是は以輕典容保拒命の罪を責正は為在は
へを容保も勿論圖藩も皆 天恩の仁惠を奉感戴は
而其果決の氣一は以て 王政を遵奉可仕上は
皇朝万一の時を憤勵は股肱の力相盡可申如此者実
は恩威両立して 王政一新と乍恐奉存は然後官軍

由呼庚を成江戸仕法も如舊例徳川氏へ由附屬して
 六師由率従いて由凱旋を為遊ゆへを誠よ 天威を
 由輝而由不暴全功を由收勿不侈其由偉勲の儀不可尚
 と奉存ゆ但江戸大城も徳川氏累代の居城よて其
 家よ取てハ大切の場所よ有之今莫大の儀を以て家
 相續致者其累代の居城を離去致し何面目よて其祖
 先の神位よ可對哉且一人の罪を以て東照多年の勲
 績も由打棄累代の居城を由召上よ相成ゆ上ハ作恐
 王政一新の由趣意とハ不奉存ゆ愈由永駐も有之上
 ハ億万の商賈共愁嘆疾恐ハ勿論不逞無頼の徒相聚

何様の災害を醸し出ても難計若然ハ 王化を損
 害有之事固より不少ハのよ無之遂ハ 天威も傷
 害もよ至可ハと乍恐奉存ゆ尤此事獨り徳川氏の
 爲よ言上仕よ無之実よ
 神州の沈浮よ係り可ハ儀と奉存ゆ當今の形勢よ至
 りて己の利を營て國害を不顧者天地神明必しも
 其罪を不宥と奉存ゆ狂妄の言不可黙止聊亦獻芹
 曝背の微忠ハ寛恕の段偏よ奉祈ゆ恐惶謹言

江戸野人 竹輶敬白

横濱新聞より訳出

運上所休日表

横濱運上所より休日多く外國商人難法の次第を申立
しるより當年分ハ左の通取極むるなり

日本四月七日

同 五月十五日

同 七月七日

同 七月十五日

同 八月朔日

同 九月九日

其余西洋の日曜日并ニクリスマスデー西洋の祭日
の運上所休日の事あり

仙臺表出張の官軍と奥羽諸侯の兵との間ニ不和を
生し奥羽方より官軍の参謀一人を殺し其他高官の
人一人を仙臺城中ニ籠置くとの風説あり或ハ云右
の報告江戸仙臺屋鋪へ達せし故ニ仙臺屋鋪の者
今よりも官軍の打入る事も知らんと大ニ恐る一兩日
以前一夜の中ニ尽く何人々立退きしとりハ信偽
未詳ととも姑く録し之看官の参考ニ備ふるあり

元松前家来當時浪人松浦竹四郎の同家藩臣の節度
々蝦夷地を巡見致し彼地の事情お心得居り者の由
逆項江戸に任居り処京師より召上京を即徴士の
列に加ふるべき哉の風聞あり其詳を不知

○ 閏四月廿日於上方水達の写

王政御一新の月ての宮公卿諸候并神社寺院等領地
高之儀 御改正可也 仰舟の間是道旧幕府より受
封の判物急よ 御用有之の間内国車勢局長差出の
振發 仰舟の事

閏四月

大政由一新万機 御親裁千載之由一時の月を爲對
御先靈由至孝之實蹟お立蒼生艱苦を爲救度深は
爲遊 宸憂の処逆徒等振々之造言を流布し愚民を
誑惑し其徒を誘ひ 天子之由保全可也爲遊 王土
を掠め 王民を苦しめ現に攘奪竊取至らざる所を
一然るに只目前の偷安を事とす 徃々逆徒の鼻息を
窺ひ臣子之大義を忘失し進止曖昧両端を持し藩も
有之哉とお関は意憾よ也 思召の他日吟味の上

可_レ出_レ 仰出_レ 旨も可有之_レ 舟此段改_レ 爲心得
御沙汰_レ 事

○ 閏四月

一時之權法を以_レ 金札 由製造十三ヶ年の間一圓通
用_レ 仰出諸侯高_レ 應_レ 拜借_レ 仰舟_レ 金札_レ
金札を以_レ 返納_レ 舟引替_レ 無_レ 之事之由

○ 太政官より 御布令 閏四月廿七日 横濱
陸軍編制 裁判所_レ 廻_レ

高 一万石_レ 舟

兵員 十人

當分之内 三人

但京畿_レ 常備九門及び畿内要衝の箇所其兵を以
警衛可_レ 仰舟_レ 同追_レ
御沙汰可有之_レ 事

高 一万石_レ 舟

兵員 五十人

但在所_レ 可_レ 備置_レ 事

高 一万石_レ 舟

金三百兩

但年分三度以上納兵員の給料は充つ

右の通

皇國一體惣高は割舟陸軍編制を爲立は条は
御出に同此旨に違は事

但勤方心得等仔細の儀は軍防事務局に可伺出事

閏四月

